

ヨガイストラクター  
に「この体勢、もっと  
開いて」と耳元で囁か  
れるたびカントを開発  
されていく話

ホットヨガスタジオに白檀と杉の香りが漂う。三十六度の湿気が肌に纏わりつき、呼吸するだけで肺の底まで蒸される。「はい、じゃあ次。合蹠のポーズ——足の裏を合わせて、膝を外に開いて」

インストラクターの逢坂朔は、低く甘い声で指示を出した。よく通るのに耳の内側を撫でるような質感。これを聞くたびに項がぞわっと粟立つのを、僕——神崎湊はもう三回分のレッスンで嫌というほど思い知らされていた。

「……っ」

足の裏を合わせる。膝を開く。たったそれだけの動作で、下腹部の奥がきゅんと引き攣った。

(だめだ、意識するな。ただのストレッチだ)

高校の体育以来、股関節を深く開く動作は全て避けてきた。あの場所を——カントの存在を意識の表面に浮かせないために。

巡回してきた逢坂さんが、僕の背後に膝をつく。大きな手が、内腿に触れた。

「もっと開いて」

耳のすぐ横で囁かれる。

「っ——」

鼓膜の裏を舐めるような低音。触れた場所からじわりと熱が広がって、骨盤の底を溶かしていく。

「力、入りすぎ。吐く息で——緩めて」

逢坂さんの親指が腸骨稜の縁を押した。他の生徒にもやっている手技だ。ただの指導だ。なのに僕の身体は、この手のときだけ全然違う反応を返す。

「ふ……っ」

(汗だ。暑いから。三十六度だから——当たり前だ)

ヨガウェアの股間が、じわりと湿った。粘り気のある、汗とは違う液体がカントから滲んでいるのを、僕はとっくに気づいている。気づいていて、認めない。

逢坂さんの手が離れた。何事もなかったように次の生徒に移っていく。

でも——内腿に残った手の熱だけが、いつまでも消えなかった。

五回目のレッスン。この日のテーマは「骨盤底筋の覚醒」。  
「骨盤底筋は、身体が一番深い場所にある筋肉です。——ここを意識できるようになると、呼吸が変わる」

逢坂さんが受講者全体に説明する。僕は最後列でマットに座ったまま、無意識に太腿を閉じていた。

前回のレッスンから毎晩、寝る前にカントが疼くようになった。逢坂さんの声が脳内で再生されるたびに、触れてもいないのに蜜が滲む。指を伸ばしかけて——毎晩、止めた。触ったら負けだ。

「スプタ・バツダ・コーナーサナ。仰向けで足の裏を合わせて、両膝を床に近づけて」

仰向けになる。天井が見える。両膝が左右に開いていく。壁一面の鏡に映る自分の姿——脚を開いて横たわる姿が、恥ずかしくてたまらない。

逢坂さんがアジャストに来た。僕の膝の横にしゃがみ、片手で内腿に触れ、もう片方の手が下腹部——恥骨の少し上に置かれる。

「ここ。骨盤底の力み、まだ取れてない」

低い声が、僕だけに降ってくる。

「——何を怖がってるんだ？」

「怖がってなんか——」

「嘘」

親指が恥骨の上をすっと撫でた。ヨガウェア越し。指導の範囲。でもその精度が——おかしい。

「ここだけ、ずっと力入ってる。五回通って一度も抜けてない」

カントがぎゅっと収縮して、蜜が——溢れた。

ウェアに、染みができている。色が変わるほどに。

逢坂さんの視線が一瞬だけ僕の股間に落ちた。そしてすぐに顔を上げて——微笑んだ。何も言わない。

「来週、プライベートレッスン入れていい？ お前の身体、グループじゃ限界がある」

(断らなきゃ)

理由は山ほどある。でも逢坂さんの手がまだ内腿に触れていて、その温度が思考を焼いている。

「……はい」

帰宅後。シャワーの蛇口を最初から冷水にした。熱い身体に冷たい水が叩きつけられる。肩も腕も冷えていく。なのに下腹部の熱だけが、どうしても冷めない。

壁に背中をつけて座り込んだ。冷たいタイルが脊椎に触れる。冷水が肌を流れ落ちるたびに、逆にカントの熱さだけが際立っていく。

指を伸ばしかけて——止めた。

(来週だけ。行って、それで——終わりにする)

終わりにできないことは、もう分かっていた。

水曜の夜。閉館後のスタジオに、僕と逢坂さんだけ。

照明は最低限に落とされている。いつもの白檀と杉の香りに加えて、ペパーミントの清涼感が鼻を刺した。なのに室温は三十八度——通常より高い。冷たい香りと、身体を蒸す熱。矛盾した空気の中で、僕の皮膚がぴりぴりと過敏になっていく。

「今日はじっくりやる。——時間は気にするな」

最初は肩甲骨のストレッチだった。腕を引かれ、背中を伸ばされる。プロの手技。少しずつ力が抜けていく。

「上手いですね……」

「元・理学療法士だから。——身体の壊し方も、直し方も知ってる」

（壊し方——）

背筋が微かに強張ったのを、逢坂さんは見逃さなかった。手が背中から腰へ移動する。腰椎を一つずつ指で辿り、仙骨に到達して——尾骨の横を、親指でぐりっと押された。

「っ——」

「痛い？」

「痛くは——」

「痛くないなら、感じてるんだ」

仰向けにされた。マットの上。合蹠のポーズ。二人きりの鏡張りのスタジオで、脚を開かされている。

逢坂さんが僕の両膝に手を添えて、ゆっくりと外側に押し広げた。ヨガブロックが二つ、膝の下に差し込まれる。骨盤が持ち上がり——カントの位置が、完全に上を向いた。

「……なんで、この角度——」

「この角度が一番、骨盤底が解放される。——お前の身体が一番正直になる角度だ」

逢坂さんの手が内腿を滑り降りた。鼠径部の際まで。ウェア越しに、カントの輪郭を指が辿る。

「——っ、それは、指導じゃ——」

「指導だよ。鼠径リンパの詰まりを確認してる」

(嘘だ)

僕は校閲者だ。嘘は見抜ける。でも逢坂さんの指が鼠径部を押すたびにカントから蜜がじゅわりと染み出して——もうウェアの色が完全に変わるほど濡れている。

「……ああ」

逢坂さんの声が半音下がった。

「——やっぱり」

「見ないで——」

「五回目のレッスンから気づいてた。お前の身体、レッスンのたびにここが濡れてた。——汗じゃないだろ」

「違——」

「違わない。お前のカント、俺の声で濡れるんだろう」

(知ってた。全部——最初から)

五回分の合理化が、一瞬で崩壊する。

「なん、で……知って……」

「理学療法士だった。カントボーイのリハビリ担当もした。——お前の身体の反応、全部わかる」

逢坂さんの指が、ウェア越しにカントの割れ目をなぞった。  
上から下へ。ゆっくりと。

「ひ……っ♡」

「五回、我慢したな。——偉かったね。でももう限界だろ」

ウエストに指がかかった。

「脱がすぞ」

首を横に振った。でも身体が動かない。蜜が溢れ続けている。

レギンスが膝まで下ろされた。ボクサーブリーフの綿が蜜で透けて、カントの形がくっきり浮き出ている。

「……すげえ濡れてる。ここまで我慢してたのか」

「やだ……っ♡ やめ……♡」

「やめない。——お前の身体が、やめてほしくないって言うてる」

布越しにクリトリスの位置を探り当てられた。円を描くように、擦られる。

「あ♡ あ♡ そこ……っ♡ そこだめ……っ♡♡」

（男なのに——こんな場所で、こんなに——）

自分の身体が信じられなかった。触られたくない場所だったはずだ。存在ごと消したかった場所のはずだ。なのに逢坂さんの指が触れた瞬間から、カントが自分の意思を持ったみたいに蜜を溢れさせて、もっともっとと催促している。



「ここ？　ここが怖かったんだ。——こんなに小さな場所を、ずっと怖がってたんだ」

クリトリスを親指と人差し指で挟まれた。布越しに転がすように揉まれる。

「ひぁ♡♡　あっ♡♡　むり、むりっ♡♡　考えられ、なく——」

「考えなくていい。——頭、使うな。身体に任せろ」

（任せたら——僕が、僕じゃなくなる——）

腰が勝手に浮いた。逢坂さんの指に押しつけている。自分の意思じゃない。身体が——裏切っている。

「あっ♡♡♡　イ——っ♡♡」

布越しの刺激だけで——達した。カントがひくひく痙攣して、蜜がボクサーブリーフから溢れて太腿を伝った。

「——イったな」

逢坂さんの指が濡れた下着に触れ、蜜の糸を引いた。

「布越していくとか、どれだけ溜め込んでたんだ」

涙が——勝手に出た。恥ずかしい。認めたくない。でも快感が全身に広がっていて、否定のしようがない。

逢坂さんが僕の涙を親指で拭った。その濡れた親指をそのまま自分の唇に運んで——舐めた。

「……甘い」

心臓が跳ねた。

「全部脱がす。——次は直接、触る」

ぐしょぐしょのボクサブリーフが剥がされた。蜜の糸を引きながら離れていく布の感触に、ぞわっと全身が粟立つ。

スタジオの照明に照らされたカントが、鏡に映っている。脚を開いて、濡れたカントを晒して、目尻に涙を溜めている自分。

「見ないで、鏡……っ♡」

「見ろ。——お前の身体がどれだけ綺麗に開いてるか、自分で見ろ」

膝をさらに押し広げられた。ヨガのポーズそのまま。でも意味が完全に変わっている。

逢坂さんの指がカントの割れ目を左右に開いた。ぬるり、と蜜がマットの上にこぼれ落ちる。

「ここ。お前が十年隠してたもの。——綺麗だ」

「綺麗じゃな……っ♡♡」

「綺麗だよ。俺が一番最初に見た。俺が一番最初に触った。——俺以外には、絶対に見せるなよ」

(独占——されてる♡♡ この人に。身体が一番奥まで——)

中指がカントの入り口に触れた。蜜でぬるぬるの指が、ゆっくり中に沈んでいく。

「ああ♡♡ ゆび、入って……きて……っ♡♡」